

学術 Weeks 2009



学問の奏であい

神戸大学大学院 人間発達環境学研究所

Designed by Maryam Behnoodi



www.h.kobe-u.ac.jp/aew

学術 WEEKS 2009 ～学問の奏であい～

11～12月

日	月	火	水	木	金	土
11/1	2	3 文化の日	4	5 ●17:00 学術 WEEKS 2009 開会式 ●(引き続き) -19:00 東アジアにおける「共に生きる実践」ー中国東北地方との接点を手がかりにー 呂先生 (帝京科学大学) @大会議室	6	7
8	9	10	11	12	13	14
	●10:30-12:10 東西両極アジア植物環境資源の研究「油糧植物の開発」 Tuna 先生 (トルコ, ナミク・ケマル大学) @A325	●15:00-17:00 からだの仕組みに関する学術交流会 Behnke 先生 (フロリダ大学) @中会議室 B	●15:00-18:00 からだの仕組みに関する学術交流会 @中会議室 B	●16:00-18:00 からだの仕組みに関する学術交流会 @中会議室 B	●からだの仕組みに関する学術交流会 (終日フィードバック)	
15	16	17	18	19	20	21
	●13:30-15:30 ロンドン大学教育大学院 (子育て支援) との学術交流会 @大会議室 ●15:00-19:00 殺陣のワークショップ 佐野功氏 @体育館	●15:00-19:00 殺陣のワークショップ 佐野功氏 @体育館	●15:00-19:00 殺陣のワークショップ 佐野功氏 @体育館	●14:00-15:30 ロンドン大学教育大学院との学術交流会 @のびやかスペース あーち ●13:00-17:30 青少年の危険行動防止のためのライフスキル教育 劉先生, 楊先生 (中国上海大学); 千須和直美先生 (シドニー大学); 並木茂夫先生 (日本学校保健学会) @大会議室 ●15:00-17:00 からだの仕組みに関する学術交流会 Delliaux 先生 (筑波大学) @中会議室 B	●ロンドン大学教育大学院との学術交流会 (終日フィードバック) ●9:30-12:00 青少年の危険行動防止のためのライフスキル教育 @大会議室 ●10:00-12:00 からだの仕組みに関する学術交流会 @中会議室 B	
22	23	24	25	26	27	28
●勤労感謝の日	●10:00-16:00 西オーストラリア大学・心理学分野との学術交流会 Morrison 先生; Maybery 先生; Newnham 氏 (院生); Farrant 氏 (院生) @大会議室 ●12:30-13:00 大合唱「スカボローフエア」 @B棟ピロティ	●10:00-17:00 西オーストラリア大学・心理学分野との学術交流会 @大会議室 ●13:20-16:00 障害者スポーツからアダプト・スポーツへ 金山千広先生 (聖和短期大学) @F256 ●18:00 合同レセプション (大会議室)	●10:00-17:00 西オーストラリア大学・心理学分野との学術交流会 (終日フィードバック) ●9:30-15:30 第5回国際市民性教育ネットワークセミナー Tudball 先生 (豪, モナシユ大学); Kjellberg 先生 (ストックホルム大学) @大会議室	●14:30-16:30 「日米女性労働セミナーの意義」 田中和子先生 (国際基督教大学) @中会議室 A ●9:30-11:30 第5回国際市民性教育ネットワークセミナー @大会議室 14:15-16:00 附属明石小授業参観と討議		
29	30	12/1	2	3	4	5
			●15:00-17:00 在米心理カウンセラーが教える留学サクセスコミュニケーション 角谷紀善子氏 (ワシントン州 シンヤルワーカー) @大会議室 17:00 学術 WEEKS 2009 閉会式	学術 WEEKS 2009 特設ページ www.h.kobe-u.ac.jp/aew		



Academic Exchange Weeks

学術 Weeks 2009

Academic Polyphony

学問の奏であい

*Graduate School of Human Development & Environment
KOBE UNIVERSITY*

..... 目次 Contents

11/5 (Thu)

- ◇ 東アジアにおける「共に生きる実践」－中国東北地方との接点を手がかりに－
1

11/9 (Mon)

- ◇ 東西両極アジア植物環境資源の研究「油糧植物の開発」
Research of plant environment resource at the two poles of east and west Asia
“Development of Bio- fuel plants”
5

11/11 (Wed) – 13 (Fri)

- ◇ からだの仕組みに関する学術交流会 (フロリダ大学) 11

11/17 (Mon), 19 (Thu) – 20 (Fri)

- ◇ ロンドン大学教育大学院 (子育て支援) との学術交流会
International Academic Interchange Meeting
with Institute of Education, University of London 13

11/17 (Tue) – 18 (Wed)

- ◇ 殺陣のワークショップ～筋肉痛のすすめ～
Invitation to Overstraining Your Muscles
～A Workshop on Fight Choreography ～ 19

11/19 (Thu) –20 (Fri)		
◇	からだの仕組みに関する学術交流会 (筑波大学)	21
◇	青少年の危険行動防止のためのライフスキル教育的アプローチ	25
11/24 (Tue) –26 (Thu)		
◇	～西オーストラリア大学・心理分野との学術交流会～ 多文化の中の心理学 ～The 2 nd International Academic Interchange Meeting with University of Western Australia～ <i>Trans-cultural Psychology</i>	37
11/24 (Tue) (12 : 30–13:00)		
◇	大合唱「スカボロー・フェア」	45
11/25 (Wed)		
◇	障害者スポーツからアダプテッド・スポーツへ To Handicapped Sports from Adapted Sports	47
11/26 (Thu)–27 (Fri)		
◇	第5回国際市民性教育ネットワークセミナー	49
11/27 (Fri)		
◇	日米女性労働セミナーの意義	55
12/2 (Wed)		
◇	在米心理カウンセラーが教える留学サクセスマニュアル How to succeed in studying abroad	57



11/5 (Thu)

東アジアにおける「共に生きる実践」
— 中国東北地方との接点を手がかりに —

東アジアにおける「共に生きる実践」

～日本と中国東北地方との接点を探りながら～

【期間】 プレセッション 10月30日（金）18:00～20:00

メインセッション 11月5日（木）17:00～19:00

【主旨】福祉制度やインクルーシヴ教育は、元来世界中が欧米諸国の考え方や先進事例を模範としてきたが、東アジア的コミュニティにおいては、他者を大切に思い、他者の意思を尊重する土着の文化がある。本企画では東アジアというまとまりで障害者福祉や障害児教育の現状を検討し、東アジアの文化に根ざした福祉制度やインクルーシヴ教育の構築を図っていく。

【招聘者及び発表者】

プレセッション 趙 没名 氏（立命館大学）

メインセッション 呂 曉彤 氏（帝京科学大学）

津田 英二 准教授（人間発達環境学研究科）

孫 揚 （人間発達環境学研究科博士前期課程1年）

高橋 眞琴（人間発達環境学研究科博士後期課程1年）

【プログラム（概要）】

プレセッション 10月30日（金）18:00～20:00

場所：神戸大学大学院人間発達環境学研究科ヒューマン・コミュニティ
創成研究センターサテライト「のびやかスペースあーち」こらぼ

内容：趙 没名 氏の話題提供による座談会

「中国の障害者福祉に関する現状及び政策」

メインセッション 11月5日（木）17:00～19:00

場所：神戸大学発達科学部 大会議室

報告1：「中国瀋陽における障害児教育と福祉制度」

孫 揚 （人間発達環境学研究科博士前期課程1年）

報告2：「地域での特別支援教育の体制とHCセンター障害共生支援部門の
取り組み」

高橋 眞琴（人間発達環境学研究科博士後期課程1年）

指定討論：呂 曉彤 氏（帝京科学大学）

総括：津田 英二 准教授（人間発達環境学研究科）

司会：榊原 久直（発達科学部4年）

【招聘者略歴】

趙 没名 氏（立命館大学）

2008年立命館大学大学院博士課程修了（博士）

中国の障害者福祉制度に関して上海市内を中心に質的調査を行う。また戦後日本の療育制度の形成史及び日中独の国際比較研究を行っている。

呂 晓彤 氏（帝京科学大学）

2006 年東京学芸大学大学院博士課程修了（博士）

立命館大学応用人間科学研究所客員研究員、埼玉県和光市教育支援センター顧問。

中国における自閉症児教育プログラムの開発を研究している。

三島海雲記念財団「第 4 5 回学術奨励賞」受賞

【報告要旨】

報告 1：「中国瀋陽における障害児教育と福祉制度」 孫 揚

中国で障害児教育が本格的に始まったのは最近のことである。障害児教育研究が始まったのは 1990 年代からのことといわれる。現在、全国に特別学校が建設され、海外の障害児教育の動向からの影響も受けて日進月歩の状況にある。専門家による特別な支援を受けながら通常学級で学ぶ随班就読の考え方も注目を浴びている。けれども、障害の重い子どもに関してはまだ十分な支援制度ができていないのが現状である。「中国障害者事業第十一次発展要綱」では、2010 年までに障害児の就学率を一般児童の就学水準にまで高めるということが目標として掲げられている。

社会の構成員として障害者の生活を保障するという考え方で障害者福祉政策は 1980 年代に始まる。1990 年代になると障害者福祉計画が策定され、体系化がめざされることとなる。また 1990 年に「障害者保障法」が制定され、権利保障という観点からの障害者福祉が進展することとなった。

こうした制度的な状況については、日本でも論文等で知りえるところである。しかし、日本にいたままでは、実態として障害のある人たちがどのような生活を送っているかということについて、地域社会や家族関係なども含めて捉えることは難しい。そこで、中国東北地方にある遼寧省の省会瀋陽市を事例として、障害者の生活している場面に出かけ、その実状の断片を報告する。そして大学の研究者と交流し、及び福祉院という社会福祉と多くの関係がある場所を現場に考察し、瀋陽を代表として東北地方などの実態を明らかにしたい。

報告 2：「地域での特別支援教育の体制と HC センター障害共生支援部門の取り組みについて」 高橋 眞琴

日本においては、従来の特殊教育の課題や世界的なインクルーシヴ教育の動向を受け、2007 年度から特別支援教育が本格実施となった。その理念である障害のある幼児・児童・生徒一人ひとりの「教育的ニーズ」の把握や特別支援教育コーディネーターの設置については、英国の制度から少なからず影響を受けているといえる。HC センター障害共生支援部門においては、2007 年 11 月に英国マンチェスター地区の公立学校において実態調査を実施した。当該地区のインクルーシヴ教育は、徹底した教育目標設定と評価のシステムを用い、少人数制の協同的な学習形態で全教職員の総意のもとに推進されていることが明らかになった。〔研究科研究紀要第 2 巻第 2 号 (2009) pp. 83-92 参照〕

本報告においては、特別支援教育実施から 2 年が経過した現在の特別支援教育の体制モデル事例を概観する。また、HC センター障害共生支援部門の取り組みの一部である障害のある子どもの生活を見据えた包括的な支援のあり方や、地域に合理的配慮を根付かせるためのインクルーシヴな学童保育の実践の現状について述べていきたい。



11/9 (Mon)

東西両極アジア植物環境資源の研究
「油糧植物の開発」

Research of plant environment resource
at the two poles of east and west Asia
“Development of Bio- fuel plants”

東西両極アジア植物環境資源の研究
“油糧植物の開発”

Research of plant environment resource at the two
poles of east and west Asia
“Development of Bio- fuel plants”

【期間】 11月9日（月） 10:30-12:10 発達科学部 A325

【主旨】 バイオ燃料素材として最近注目されているスイッチグラスならびにジャトロファについて、今後のアジアでの油糧植物の研究の発展について議論する。

【講演者ならびに招聘者】

Dr Metin TUNA (Field Crops Department, Namik Kemal University, Turkey) / Associate Prof.

近江戸伸子准教授 (神戸大学人間発達環境学研究科)

Nobuko OHMIDO (Graduate School of Human Development and Environment, Kobe University, Japan) / Associate Prof.

・ 講演者

Metin TUNA
Associate Professor
Namik Kemal University, Turkey



・ 略歴

2000-2005
Assist. Prof. Dr.
Field Crops Department, Trakya Univ.,
Turkey
2005- Presence
Assoc. Prof. Dr. Field Crops
Department, Namik Kemal Univ., Turkey

TUNA 博士は、トルコ共和国第2の都市 Tekirdag に位置する Namik Kemal 大学に所属し、トルコにおける飼料植物ならびにバイオ燃料に関する植物ゲノムの研究分野で著名な研究者である。2008年の11月に、当研究科学生も発表した大阪で開催された国際染色体学会で交流し、双方の学生の指導も含めた共同研究を行うことで合意した。トルコは、アジアとEUの境界地域であり、トルコ国と当研究科との学術協定も前例なく、この招聘が学術交流の第1歩となる。

・ 講演概要

近年、石油に代わる代替エネルギーとしてトウモロコシからバイオエタノールが生産されるようになってきた。トウモロコシからバイオエタノールを生産する動きがあるが、生産者がトウモロコシに生産を切り替えたことにより、他の農作物の価格高騰を引き起こす問題も多く発生してきている。

スイッチグラスとは、イネ科の多年生熱帯牧草で原産地はアメリカであるが、乾燥に強く成長が早いのが特徴でアジアのほとんどの地域で生産が可能である。スイッチグラスは、糖化と発酵によりエタノール生産が可能な植物であり、現在、トウモロコシに替わるエタノール生産原料としてトルコでも注目されている植物である。このスイッチグラスを用いた、新しいプロジェクトについて、紹介する。

・講演者

近江戸伸子准教授
神戸大学人間発達環境学研究科

・略歴

2001年 中央農業総合研究センター主任研究官
2007年より 神戸大学人間発達環境学研究科准教授

Nobuko Ohmido
Associate Professor
Graduate School of Human Development
and Environment, Kobe University



1991- 2001

Researcher, National Agricultural Research Center

2001 –2007

Associate Professor,

Faculty of Human Development, Kobe Univ.

2007 – Presence

Graduate School of Human Development and Environment, Kobe Univ.

・講演概要

ジャトロファは中南米原産の落葉低木で、その種子には、約30%という豊富な油分が含まれ、バイオディーゼルとして使用できることから、新たなバイオ燃料の原料として注目を集めてきている。注目されている理由は種の油分だけではなく、バイオ燃料の原料として様々なメリットがある。最も大きな理由は、非食用であり食料と競合しないことである。また、乾燥や高温に強く荒地でも生育可能という特徴があり、畑や森林として使用されている土地を奪わずに栽培出来る。これらの特徴から、食糧との競合問題は回避できる。またトウモロコシやサトウキビのような1年生植物ではなく、多年生植物であり、生長後は約50年間にわたって実をつけ、安定して収穫が出来るという特性がある。このようにジャトロファはバイオ燃料として様々なメリットを持つため、東アジアを中心に国内外で広く注目され、研究され始めている。



11/11 (Wed) – 13 (Fri)

からだの仕組みに関する学術交流会
(フロリダ大学)

からだの仕組みに関する学術交流会

—骨格筋の微小循環レベルにおける酸素運搬と利用—

【期間】 2009年11月11日（水）～13日（金）

【主旨】 歩いたり、走ったりすると筋肉では多くの酸素が利用されるが、その酸素がどのように筋肉に運ばれるのかを、筋の周りにある血管での血液の流れからみるものである。この内容をもとに海外の研究者との交流を通して、国際的な感覚を身につける。

【講演者】

Dr. Brad Behnke (Department of Applied Physiology and Kinesiology, University of Florida)

【プログラム】

11月11日（水） 15:00～17:00

大学院生・学生との交流会（中会議室B）

11月12日（木） 16:00～18:00

講演会（中会議室B）

演者：Dr. Brad Behnke

タイトル：The delivery and utilization of oxygen at the microcirculatory level within skeletal muscle

要旨：筋内にある毛細血管は筋へのエネルギーや酸素の供給には欠かせないもので、その数は筋の種類によっても異なる。筋の動きによってもここを流れる血液は影響されるなど、末梢部において巧みに調節されている。今回は、この血管での血液の流れ（微小循環）について最新の情報を提供するとともに、国際的な研究交流のあり方についても意見交換を行う。

11月13日（金）

終日：大学院生によるフィールドワーク

発表者略歴

Dr. Brad Behnke is an assistant professor in the Department of Applied Physiology and Kinesiology. After receiving his Ph.D. from Kansas State University College of Veterinary Medicine (2003), he was a post-doctoral fellow in the Department of Health & Kinesiology at Texas A&M University and in the Department of Exercise Physiology at West Virginia University School of Medicine before coming to the University of Florida.

<http://hhp.ufl.edu/dir/links/behnkeB.php>



11/17 (Mon), 19 (Thu) – 20 (Fri)

ロンドン大学教育大学院(子育て支援)との
学術交流会

International Academic Interchange
Meeting with Institute of
Education, University of London

第3回 ロンドン大学教育大学院(子育て支援)との学術交流会

International Academic Interchange Meeting with Institute of Education, University of London

【期間】 2009年11月17日(火)～20日(金)

/17th (Tue)～20th (Fri) November, 2009

【主旨】 イギリスの子育て支援～産後ケアからの地域支援～に学ぶ

/Child and Family Support, Postnatal Care in the UK

【講演者】 メグ・ウィギンズ先生(ロンドン大学教育大学院 上席研究員)

/Meg Wiggins (Senior Research Officer, Social Science Research Unit, Institute of Education, University of London)

【司会】 伊藤 篤先生(神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授)

/Atsushi Ito (Professor, Graduate School, Kobe Univ.)

【プログラム / PROGRAM】

◇11月17日(火) / 17th November (Tue)

13:30～15:30 発達科学部 大会議室(A棟2階)

/ Main Conference Room, Kobe Univ.

学術講演「英国における産後家庭へのケア:支援はどう組み立てられ届けられるのか」

/ MAIN LECTURE “Postnatal Care in the UK

: how services are organized and delivered”

◇11月19日(木) / 19th November (Thu)

14:00～15:30 サテライト施設『のびやかスペース あーち』(灘区神ノ木通3-6-18)

/ Satellite Space “ARCH”

ミニ講演 「英国における産前・産後にわたる連続的支援」

/ SHORT LECTURE “The succession from antenatal to postnatal

services in the UK : how the services are organized”

◆11月20日(金) / 20th November (Fri)

10:30～16:30 有馬フィールドワーク: Fieldwork: One-day hunting trip

for traditional handcrafts around Arima, the spa-area

【講演要旨】

◇11月17日(火) / 17th November (Tue)

学術講演 「英国における産後家庭へのケア：支援はどう組み立てられ 届けられるのか」（産後家庭への予防的支援と介入的支援について）

英国において、地域レベルの産後家庭に対する支援は、どのように組み立てられているのか？これらの支援のうち、どの程度が産後女性の家庭に届けられ、どの程度がヘルス・センター（保健所）やコミュニティ・センター（地域拠点）に来る女性に届けられるのか？母親と新生児の心身の健康に対して誰が責任をもつのか？

この講演では、以上のような問いにかかわって、主に次のような内容が説明されます。

- 英国の産後家庭へのケアにかかわる支援の現状とその支援が家庭に及ぼす効果
- 母親と新生児のケアにかかわる病院および地域の助産師・家庭訪問員・かかりつけ医師の役割
- 母乳育児・産後うつ・ペアレンティング技能（親としてのあり方）に対して適切なフォーマルな支援とインフォーマルな支援
- すべての産後母親に提供されるユニバーサル支援と社会的・医学的に「困難さ」を抱える母親に提供されるターゲット支援との比較
- 産後家庭への質の高い支援を目指す実践者たちが直面している主な課題・問題点

この講演内容には、英国において「母親になっていくという経験」をテーマとした演者の現在の研究で得られた実例も含まれます。

MAIN LECTURE “Postnatal Care in the UK : how services are organized and delivered”

‘In Britain, how are postnatal services organized in the community? How much of these services are delivered in mother’s homes, and how much at health and community centers? Who is responsible for ensuring the health of new mothers and that of their babies? This lecture will provide a background to the current practices related to postnatal care in the UK, and will explore the effects of these services on families. It will explain the roles of hospital and community midwives, health visitors and GPs in relation to the care of mothers and newborn babies. This lecture will provide information about the formal and informal support schemes that are in place for breastfeeding, postnatal depression, and parenting skills. The universal services offered to all mothers will be compared with the targeted services for those deemed to be more ‘at risk’ of social or medical complications in the postnatal period. The main challenges being faced by practitioners in

delivering quality postnatal services will also be discussed. This lecture will be illustrated with examples from my current research regarding the experience of becoming a mother in the UK.’

◇11月19日(木) / 19th November (Thu)

ミニ講演 「英国における産前・産後にわたる連続的支援～支援はどのように組み立てられるか？」 (産科施設から行政・地域へつなぐ)

この講演では、英国における出産前後の家庭に対する支援の組み立てに関するいくつかの重要な側面に焦点を当てていきます。特に、出産前の病院での支援から出産後の地域での支援への移行が中心的に説明されます。当事者である女性の身体の状態・心理状態・社会的背景などに関する情報がどのように集められるのか、そして、これらの情報が病院から地域のヘルス・ケア提供者にどのように申し送られるのかを解説します。また、この時期の対象者が利用しうる広範囲のサービスを、それらをおこなうには誰が適しているのか、それらを誰が実際に提供しているのかという詳細な情報とともに紹介します。

SHORT LECTURE “The succession from antenatal to postnatal services in the UK : how the services are organized”

This talk will focus on some key aspects of the organization of maternity services in Britain. It will concentrate on the transition from antenatal hospital services to community postnatal services. How information is collected from women about their physical health, mental well-being, and social background will be discussed, as well as the methods which are used to pass this information between hospital and community health care providers. The talk will cover the range of services available, providing detailed information about who is eligible for these services and who provides them.

メグ・ウィギンズ先生の略歴
Meg Wiggins – biography



Meg Wiggins is a social researcher whose work focuses primarily on maternity services and young people's health issues. Meg did her undergraduate degree at Northwestern University in Chicago, and her postgraduate study at University College London. She has carried out a number of studies of maternity services; concentrating primarily on women's experiences of the information and support provided. Currently she is researching the experience of first-time motherhood, comparing findings with a similar study done 30 years ago. Previous work has included the co-ordination of the Social Support and Family Health Study, a RCT of postnatal support for women living in disadvantaged inner city areas. She has also recently led three large-scale national evaluations of UK Government initiatives relating to the health of young people: the Sure Start Plus initiative for supporting pregnant teenagers and teenage parents; the Young People's Development Programme, and most recently the Teenage Health Demonstration Sites evaluation.

*Expertise details : Meg Wiggins is an Assistant Director in the Social Science Research Unit. Her recent research work has concentrated on projects relating to socially excluded young people, particularly focusing on teenage parenthood. She has managed and directed large-scale mixed-method national evaluations of government pilot initiatives in this area (The Young People's Development Programme and the Sure Start Plus initiative), as well as conducting longer term, in-depth research on this topic. Previously, most of her research concentrated on the experiences of families around the time of a birth of a baby, including leading a randomized controlled trial of support services for families.

* (by SSRU)

Contact Details : Social Science Research Unit, Institute of Education
18 Woburn Square, London, WC1H 0NR / E-mail: m.wiggins.@ioe.ac.uk



11/17 (Tue) – 18 (Wed)

殺陣のワークショップ～筋肉痛のすすめ～

Invitation to Overstraining Your Muscles
～A Workshop on Fight Choreography～

殺陣ワークショップ ～筋肉痛のススメ～

Invitation to Overstraining Your Muscles

～ A Workshop on Fight Choreography ～

【期間】 2009年11月17日（火）～18日（水）
15:00～19:00 神戸大学 発達科学部 体育館

【主旨】 学術 WEEKS 「かまえづくりワークショップ」企画として、プロの殺陣師によるワークショップを開催する。殺陣（アクション）という新たな世界を体感することで、自身の身体表現の可能性、他者とのコミュニケーション能力の開発を目指す。

【講師】 佐野 功（俳優・殺陣師） アシスタント 中居晃一（俳優・殺陣師）

【プログラム（概要）】 舞台や映画などでの闘いのシーン。それを細分化し、演劇のために再構成した極めて安全な「殺陣／アクション」のワークショップです。初心者から演劇関係者まで幅広く参加できる内容で、自分の身体をフルに活用した素手での立ち回りを行います。

講師は、俳優・殺陣師として活躍する佐野功さん。芝居ありきのアクションにこだわった論理的かつ安全なオリジナル・メソッド・ワークショップには定評があり、昨年度～今年度の本学ゲストスピーカーでの特別ワークショップも大好評を博しました。

来年2月には、本学講師 関典子との競演作『犯情』で、アジア最大級のコンテンポラリーダンスフェスティバル「横浜ダンスコレクション R 2010 横浜ソロ×デュオコンペティション+」本選に出場決定。是非この機会に、ジャンルを超えた身体表現の妙を、ご体験ください。



【講師プロフィール】

佐野 功（さの いさお／俳優・殺陣師）



桜美林大学文学部総合文化学科パフォーマンス・演劇コース卒業。つかこうへい、平田オリザらに師事。現在、フリーランスの俳優として、劇団「柿喰う客」などに多数出演する他、殺陣師として振付・指導も行い、演劇的要素を加えたオリジナル・メソッド・ワークショップを、大学・高校・劇団などで展開中。「第4回 神保町花月エチュ1グランプリ」にて優勝・MVPをダブル受賞。



11/19 (Thu) – 20 (Fri)

からだの仕組みに関する学術交流会
(筑波大学)

からだの仕組みに関する学術交流会

－筋内の活性酸素の働き－

【期間】 2009年11月19日～21日

【主旨】 高酸素や低酸素条件などの環境要因の変化が変化すると骨格筋運動神経コントロールが影響を受け、筋内での活性酸素生成が変化する。この活性酸素は通常の酸素よりも反応性に富むので、生体に毒性をもたらすととみに、筋内の感覚受容器にも影響する。今回の学術交流会では、この活性酸素のことに触れ、また、大学院生が自身の発表を通じて、英語での発表方法の修得をめざす。さらに、海外の研究者との交流を通して国際的な感覚を身につける。

【講演者】

Dr Stéphane Delliaux (日本学術振興会外国人特別研究員, 筑波大学)

【プログラム】

11月19日(木) 15:00～17:00

大学院生・学生との交流会 (中会議室B)

11月20日(金) 10:00～12:00

学術交流会

1) 講演会

演者: Dr Stéphane Delliaux

タイトル: Oxygen: a major protagonist of muscle sensing

要旨: 運動中筋では酸素が多量に使われるため、活性酸素も生成される。酸素と活性酸素が筋内の感覚受容器を刺激するため、筋の活動の情報源になる。今回は、筋活動時にこの情報源がどのように重要なのか最新情報を提供するとともに、国際的な研究交流のあり方についても意見交換を行う。

2) 大学院生による発表

天野達郎（人間発達環境学研究科前期課程1年）

The heat loss responses to isometric exercise under mildly hyperthermic conditions in sprinters and distance runners

要旨：ヒトの熱放散反応は温度の変化を伴う温熱性要因とそれを伴わない非温熱性要因によって修飾されている。日常的な運動トレーニングによって熱放散反応は改善され、運動トレーニングの違いがその改善の程度に影響する。本研究では異なる運動トレーニングを行う長距離選手と短距離選手の非温熱性要因による熱放散反応について検討した。その結果、運動トレーニングの違いは非温熱性要因による熱放散反応に影響を及ぼさなかった。しかし、運動負荷条件の検討も含め、今後さらに研究を進める必要があると考えられる。

梶田裕輔（人間発達環境学研究科前期課程1年）

Analysis that the factors affect one's sports preference of physical activities and sports needs among middle and older adults

要旨：中高齢者の運動・スポーツ希望種目数に影響する要因は、対象者全体ではレジャー便益期待値、現在の運動・スポーツ実施頻度、健康自己評価レベルであった。次に、男性ではレジャー便益期待値と現在の健康自己評価レベル、女性では支援便益期待値と現在の運動・スポーツ実施頻度であった。最後に、中年期では現在の運動・スポーツ実施頻度、レジャー便益期待値、高齢者では現在の健康自己評価レベルと、レジャー便益期待値であった。

11月21日（土）

大学院生によるフィールドワーク

招聘者略歴

Dr Stéphane Delliaux 生理学者・医師

1975年にフランスで生まれ、2003年 Timone 大学医学部を卒業し、医師免許を取得。その後、2007年に Méditerranée 大学にて、生理学で博士号を取得する。2004年から2009年まで、Méditerranée 大学での研究員、Marseille 大学での教員を歴任。2009年度の日本学術振興会特別研究員に採択され、同年度5月に来日。



11/19 (Thu) – 20 (Fri)

青少年の危険行動防止のための
ライフスキル教育

青少年の危険行動防止のための ライフスキル教育的アプローチ

【期間】 2009年11月19日(木) 13:00~17:30 発達科学部大会議室
2009年11月20日(金) 9:30~12:00 発達科学部大会議室

【主旨】 ライフスキル形成を基礎とする危険行動防止プログラムに関する理論・実践等について交流し、将来のアジア・オセアニア地域における国際共同研究につなげる。

【講演者】 川畑 徹朗, 鄧 偉志, 楊 鏗, 並木 茂夫, 千須和 直美
宋 昇勲, 菱田 一哉, 菅野 瑤

【プログラム】

2009年11月19日(木) 13:00~17:30

- | | |
|-------------|--|
| 13:00~13:05 | 開会の挨拶 |
| 13:05~13:40 | 川畑 徹朗
(神戸大学大学院人間発達環境学研究科 教授)
「日本における青少年の危険行動防止とライフスキル教育」 |
| 13:40~14:40 | 鄧 偉志
(中国上海大学社会学学部 教授)
「上海市における青少年の危険行動に関する現状及び対策研究」 |
| | - 休憩 10分 - |
| 14:50~15:30 | 宋 昇勲
(神戸大学大学院人間発達環境学研究科 博士課程後期課程1年)
「インターネット上の性に関する情報への接触が青少年の性行動に及ぼす影響
—ライフスキル教育的アプローチの可能性の追究—」 |
| 15:30~16:20 | 千須和 直美
(シドニー大学教育社会福祉学部修士2年)
「オーストラリアにおけるボディイメージ改善教育の動向」 |
| | - 休憩 10分 - |
| 16:30~17:30 | 並木 茂夫
(財団法人日本学校保健会事務局次長)
「中学校におけるライフスキル教育の実践とその効果」 |
| 18:30~ | 懇親会 |

2009年11月20日(金) 9:30~12:00

9:30~9:50

菱田 一哉

(神戸大学大学院人間発達環境学研究科 博士課程前期課程2年)

「いじめ被害の影響とレジリエンシーとの関係について

—新潟市内の中学校2校で行った予備調査の結果報告—

9:50~10:10

菅野 瑠

(神戸大学大学院人間発達環境学研究科 博士課程前期課程1年)

「ネットいじめ防止に有効なアプローチの検討」

- 休憩 15分 -

10:25~11:25

楊 鏗

(中国上海大学社会学学部 講師)

「中国における青少年の『ネット中毒』の現状と危険行動防止プログラムの開発」

11:25~12:00

総合討論

【要旨】

日本における青少年の危険行動防止とライフスキル教育

川畑徹朗（神戸大学大学院 人間発達環境学研究所 教授）

日本においては、喫煙、飲酒、薬物乱用、早期の性行動や若年妊娠、いじめ、暴力、不登校など、思春期の様々な危険行動あるいは問題行動は依然として重大な問題であるばかりか、問題によってはより深刻化する傾向さえ認められる。こうした事態に至ったのはなぜなのだろうか。それは恐らく、日本における従来の取組が対症療法的であり、また相互の関連性がなかったためであると考えられる。一体もっと本質的で有効な解決法はないものなのだろうか。

国内外の研究によると、思春期に危険行動という「症状」を示す子どもたちには、低いセルフエスティームを始めとするライフスキル（心理社会的能力）の問題が必ずと言ってよいほど先行して起こる。そのため、危険行動という「症状」が顕在化する前に、様々な危険行動の共通要因であるライフスキルの形成を促すことが、根本的な問題解決につながり、また効率的かつ効果的なアプローチであると考えられるようになってきた。

欧米では、1970年代後半に喫煙、飲酒、薬物乱用防止にライフスキル教育が導入され、その有効性が確認された後、性、いじめ、摂食障害を含む様々な危険行動の防止に適用されて行った。

日本では、ライフスキル教育の有効性に関する評価研究はまだその緒についたばかりであるが、喫煙、飲酒、性に関する行動や自己効力感などに対して好ましい影響を及ぼす可能性があることが明らかになりつつある。例えば、著者らが実施した新潟県某市における介入研究の結果によれば、プログラムを導入する前は、中学校3年生の喫煙者率や飲酒者率はほぼ全国値もしくはそれ以上であったが、導入後は次第に低下し、最近の質問紙調査（2007年3月実施）の結果によれば、飲酒者率は半減し、喫煙行動に関しても好ましい効果が認められた。

シンポジウム当日は、著者が代表を務めるJKYB ライフスキル教育研究会（1988年発足）が取り組んで来た様々な試みを紹介するとともに、今後の方向性や課題についても述べることにしたい。

***** 講演者略歴 *****

東京大学教育学部体育学健康教育学科（健康教育学コース）卒業、
同大学院教育学研究科（健康教育学専攻）修士課程、同博士課程、
東京大学教育学部助手を経て、現職へ

平成4年10月、東京大学において博士（教育学）を取得。専門分野は健康教育学
青少年の危険行動防止のためのライフスキル教育プログラム開発
JKYB (Japan Know Your Body) ライフスキル教育研究会の代表

上海市における青少年の危険行動に関する現状及び対策研究

鄧 偉志 上海大学社会学部教授

改革開放 30 年以來、中国の經濟、社会は飛躍的に發展しつつある。国際化大都市である上海市においては、社会經濟、政治、文化の大きな変化に伴う社会問題も深刻化が進んでいる。中国における青少年の危険行動に関する調査研究によると、青少年の危険行動の顕在化、深刻化はその程度を増すばかりであることが明らかになっている。また、心理的能力及び社会的能力の欠如が危険行動を起こす青少年らに共通してみられることが分かった。上海市では、青少年の危険行動における関連要因を分析し、青少年がある問題に直面した時に必要となる心理社会的能力を促すための介入プログラムの開発を目的として、青少年危険行動における現状調査を行った。本調査は、上海市の中高生約 4,000 人を対象とし、大きく 6 つの危険行動に関する要因分析が行われた。結果によれば、自己要因、親子関係、友人関係、環境要因（学校、家庭、地域、メディア等）が青少年の危険行動に相互に関連しながら大きく影響していることが明らかになった。つまり、青少年の健やかな成長を促すため、また、彼らの危険行動を事前に予防するためには、日常生活の中で生じる諸問題を効果的に解決できる心理社会的能力の育成を目的とする学校生活技能教育（ライフスキル教育）が最も有効なアプローチである。

また、中国は「受験大国」とも言われ、受験戦争による先生や保護者からまたは自分自身からの圧力により彼らはやがて消極的になり、うつ病を患う場合や安易に危険行動をとる場合も多々あると言われている。こういった状況の中で、極めて限りのある余暇（leisure time）の有効的な使い方は青少年の危険行動防止につながる可能性があると言われている。

この度、神戸大学の学術交流会においては、「上海市青少年の危険行動に関する現状及び対策研究」について紹介するとともに、青少年の健康教育における学校生活技能教育（ライフスキル教育）の有効性及び今後の課題について交流を深めたい。また、中国における余暇教育（Education of Leisure Time）について簡単に紹介することにした。

***** 講演者略歴 *****

1960 年、上海大学社会学院経済学部卒業。その後、上海社会科学院、華東局政治研究室、『自然弁証法』出版社、『紅旗』出版社、中国科学院研究室に勤める。1987 年以降は、中国百科全書出版社上海分社において編集委員を務め、上海大学社会学部教授、上海市社会学会会長。主な著作：『中国家族演变』『生活的觉醒』。

インターネット上の性に関する情報への接触が青少年の性行動に及ぼす影響 ーライフスキル教育的アプローチの可能性の追求ー

宋 昇勲（神戸大学大学院人間発達環境学研究科 博士課程後期課程1年）

現代社会は「メディア社会」とも言われ、テレビ、映画、雑誌、ビルボードなど、様々な形態のメディアからの情報が満ち溢れており、我々は多かれ少なかれその影響を受けている。メディアの中でもとりわけインターネットは、現代社会の最も重要な情報源の一つになっており、若者を中心にその利用は年々増えつつある。しかし、インターネットには間違った情報や有害な情報も多く、青少年に好ましくない影響を及ぼす恐れがある。特にインターネット上の性に関する情報は、その数が他の有害情報より多く、内容的にも刺激的なものが多いため、その危険性が高いと言える。まだ身体的、心理的に成長段階である青少年においては、情報に関する判断力もまだ未熟なため、インターネット上の数多くの情報の中から自分に必要な情報だけを獲得するのは簡単なことではない。インターネット上の刺激的な情報に接し、性や異性に対して偏った認識を持ったり、心理的衝撃を受けてトラウマなどの心理的外傷になったり、場合によっては、犯罪に至ることも多く報告されている。

このようなインターネット問題の解決案としてフィルタリングが挙げられるが、フィルタリングの技術は完全ではないため、インターネット上の有害な情報をすべて防ぐことはできない。そこで、フィルタリングなどの環境づくりに加えて、子どもたちへの教育を行い、自ら自分自身を守ることができるように、意識の向上とスキル形成を図ることが重要である。そのためにはまず、インターネット上の性に関する情報が青少年の性行動に及ぼす影響のプロセスや、そうした悪影響を抑制するための保護要因を明らかにする必要がある。しかし、インターネットと性に関する従来の研究の多くは、インターネット上の性に関する情報への接触経験といった実態調査であり、インターネット上の性に関する情報への接触が子どもたちの性行動に及ぼす影響のプロセスを追究した研究は少ない。

そこで本シンポジウムでは、日本で行った調査の結果に基づいて、インターネットが青少年の性行動に及ぼす影響と、ライフスキル教育的アプローチの可能性について議論する。

オーストラリアにおけるボディイメージ改善教育の動向

千須和 直美（シドニー大学教育福祉学部修士2年）

オーストラリアの深刻な健康問題のひとつとして、アメリカに並ぶ肥満大国であるということが挙げられる。それに加えて青年期においては、食行動障害や極度のダイエット行動も大きな問題となっている。そのためこのような食に関わる問題行動に共通する要因の1つとしてボディイメージ不安に着目し、食に関する包括的な改善・予防教育プログラムを行うことにより、健全な食に関わる健康行動を促すこと、さらにはウェルビーイングの向上がはかられている。

ボディイメージとは、心理的にとらえられる全体的な体型イメージのことで、実際の体型と自分が感じている体型イメージが異なるときに「ボディイメージ不安」として健康行動に影響を与えることが知られている。特に、実際には健康的な体型であるにもかかわらず、太っているというゆがんだイメージを持ってしまうことから始まるダイエット行動などは、多くの青少年において報告されている。また近年、こういった状況は低年齢化してきており、早期予防の必要性が高まっている。ボディイメージがゆがむ要因には大きく個人的・生物学的・社会文化的要因が挙げられる。なかでも、外的要因である社会文化的要因（家族・友人・メディア等）は適切な対処法を学ぶことでその影響を軽減できるようになることから、教育プログラムの中でも重点的に取り扱われている。

本シンポジウムでは、これまでに報告されてきたボディイメージ不安とその要因、健康行動との関連性、その影響に対処できるよう行われてきているオーストラリアでの教育プログラムを紹介し、今後の日本での健康教育への応用可能性について議論する。

「中学校におけるライフスキル教育の実践とその効果 -セルフエスティームの形成に焦点を当てて-

川口市立十二月田中学校の実践を通して

研究テーマ「性と心」 ——ライフスキルの指導を基盤として——

並木 茂夫（財団法人日本学校保健会事務局次長）

中学生期は、子どもの体から大人の体へと急激で劇的な変化の現れる時期である。そして、体の変化とともに、自我に目覚め、悩みや不安、好奇心、大人への憧れや反発などの、心の揺れが大きくなる時期でもある。この時期に自己を受け止め、いかに自己のあるべき姿を追求していくか、また、生きていく上でのどのような行動の指針を形成するかは、生涯に大きな影響を与えることになる。

このような思春期を賢明に乗り越え、豊かな人格を形成していくためには、子どもたちを取り巻く温かい人間関係と、健全な社会環境が必要である。しかし、わが国の現代の社会状況、特に、希薄な人間関係や社会の教育機能の低下は、子どもたちから行動選択の規準となる適切な価値観や倫理観、自律的に行動する力を身に付ける機会を奪いつつある。さらにマスメディアの過激な情報の氾濫は、子どもたちの精神的発達に大きな影響を与え、思春期の性の逸脱行動をはじめ、多くの問題が引き起こされている。

思春期の子どもたちがこれらの問題に対応しながら健全で豊かな人格を形成していくためには、学校教育において「生きる」ことの本質を捉えるための正しい性知識を獲得することと、セルフエスティームに裏打ちされた、適切な意志決定や正しい行動選択ができる「心の能力」（ライフスキル）を獲得していくことが必要であると考えられる。

川口市立十二月田中学校の『性と心』をテーマとした健康教育に関する研究は、思春期特有の心の問題の考察から、その有効な手立てを具体化し、性に関する知識の獲得と、「心の能力」を育てることで、思春期の様々な問題に対応していくための生活化できる実践力を身に付けさせることを目的として行われた。

*****講演者略歴 *****

日本学校保健会事務局次長。元埼玉県川口市立十二月田中学校校長。1983年、文部省の薬物乱用防止指導委員として我が国初の「喫煙、飲酒、薬物乱用防止の指導手引き書」作成にかかわり、以後、各種薬物乱用防止教育に取り組む。ライオンズ・クエスト・プログラムの日本導入に当たっては教材開発の責任者を務めた。芝東中学校へのプログラム導入時の校長で、パイロット事業実施に尽力された。

いじめ被害の影響とレジリエンシーとの関係について —新潟市内の中学校 2 校で行った予備調査の結果報告—

菱田一哉（神戸大学大学院人間発達環境学研究科 博士課程前期課程 2 年）

いじめは被害者に、低い心理的ウェルビーイング、低い社会適応、精神的苦痛、そして身体的不調をもたらすことが明らかになっている。文部科学省と国立教育政策研究所生徒指導研究センターが平成 19 年に発行した「いじめ問題に関する取り組み事例集」によると、学校はいじめ被害低減のため、いじめをさせない対策と同時に、きめ細かなチェックでいじめ被害の兆候を掴もうとしたり、訴えやすい雰囲気を作ったりする対策に取り組んでいる。しかし、こうした環境的アプローチと併せて、いじめ被害者がいじめをはね返す能力や、適切な時にふさわしい相手へサポートを求める能力についても育んでいかなくては、巧妙化し可視性が低くなっていくいじめの特性には対応できないと考える。

そこで本研究では、著しい逆境に置かれているにもかかわらず良好な適応を果たす人格特性や能力であるレジリエンシー（弾性回復力）、そしてレジリエンシーと密接な関係があり、いじめ被害の低減に有効であると考えられるソーシャル・サポートとライフスキルに注目し、いじめ被害の影響の緩衝要因としての役割を明らかにすることを目的とした。

方法は、予備調査として本年 6 月下旬と 7 月下旬に中学校 2 校約 1,000 名を対象に、本調査として 10 月下旬から 11 月上旬にかけて中学校 8 校約 2,800 名を対象に、自記入式無記名調査を実施することとした。

本研究に先立ち、次の仮説を設けている。仮説 1. レジリエンシー、ソーシャル・サポート、ライフスキルの高い生徒は、いじめを受けにくく、いじめを受けても効果的に対処し、影響も小さい。仮説 2. レジリエンシーとソーシャル・サポートとライフスキルとは、それぞれ正の相関を示す。仮説 3. いじめの影響がより深刻化していくプロセスにおいて、緩衝要因（レジリエンシー、ソーシャル・サポート、ライフスキル）の果たす役割は異なっている。

予備調査の主な目的は、本調査での調査項目を選定するために、いじめ被害やいじめの影響と関係が小さい項目を削減することであった。シンポジウム当日は、予備調査の結果を中心に報告する予定である。

ネットいじめ防止に有効なアプローチの検討

菅野 瑠（神戸大学大学院人間発達環境学研究科 博士課程前期課程 1 年）

急激な技術の進歩により、わたしたちを取り巻く情報量は飛躍的に増加している。また、情報の形態についても、放送や新聞等のマスメディアからインターネットのようなパーソナルメディアまで多様化が進んでいる。特に、インターネットはあらゆるジャンルの情報にグローバルにアクセスすることを可能にした。

しかし、インターネットの普及は利便性とともに新たな問題点を生み出している。現在、インターネットが引き起こす問題の一つとして、ネットいじめも大きな問題となってきた。ネットいじめとは、携帯電話やパソコンを通じて、インターネット上のウェブサイトの掲示板などに、特定の子どもの悪口や誹謗・中傷を書き込んだり、メールを送ったりするなどの方法によって、いじめを行うものであり、平成 19 年度のネットいじめ認知件数は、5,899 件に上り、前年度の 4,883 件から 1,016 件増加したことが明らかになっている（文部科学省，2008）。

そこで本シンポジウムでは、ネットいじめの特性を把握し、ネットいじめ防止に有効と思われるアプローチについて報告する。



中国における青少年の「ネット中毒」の現状と 危険行動防止プログラムの開発

楊 鎰 (YANG Zeng) Ph.D.
(上海大学社会学部・ソーシャルワーク教育研究センター)

長時間のネットサーフィンが強迫行為と見做され、インターネット症候群に属す。青少年にとっては、「危険行動」だと認定されうる。現在、中国ではこのような問題が社会問題としても非常に注目されている。

2009年8月に、「ネット中毒」(中国語：網癮)の治療を受けた16歳の少年鄧森三が死亡したという「鄧森三事件」がきっかけとなって、社会輿論の批判とともに、今まで「ネット中毒」に対するさまざまな矯正と治療方式に問題があり、またそれらの正当性と安全性が問われている。こうした中、「ネット中毒」の予防と治療のために、より安全で、青少年に相応しい健康教育のプログラムが必要であるが、具体的にどのようなプログラムを選択し、どのように実践を通して開発するかが焦眉の課題となる。

近年、「ライフスキル教育 (life skills education)」の理念を鑑み、国際的な最新動向と実践を視て、中国における「ネット中毒」に対する予防と治療のため、「ライフスキル教育」は有効な教育プログラムとして開発できると考えられるのである。

ライフスキル教育と言えば、最初に喫煙・飲酒・薬物乱用防止プログラムが立ち上げられ、その教育的な有効性が高く評価されているが、また生活習慣病の予防を目的とした総合的健康教育プログラムの開発も進められている。しかし、このようなプログラムが「ネット中毒」のような精神問題、または「心」の問題に適切に対応できるかどうかは、詳しく検証されていないようにも思われる。

今回の学術交流を通して、ぜひライフスキル教育が「ネット中毒」の予防と治療に有効になるかどうかを確認させていただきたい。

***** 講演者略歴 *****

1999年7月—2001年2月	北京聯合大学機械工程学院社会科学部	助手
2001年3月—2001年8月	北京聯合大学社会科学部	助手
2005年3月	大阪教育大学大学院教育学研究科	学校教育専攻(修士課程)修了
2008年3月	神戸大学大学院総合人間科学研究科	人間形成科学専攻(博士課程)学位取得 修了
現在	上海大学社会学部	講師



11/24 (Tue) – 26 (Thu)

～西オーストラリア大学・

心理分野との学術交流会～

多文化の中の心理学

～The 2nd International Academic
Interchange Meeting with University of
Western Australia～
Trans-cultural Psychology

～西オーストラリア大学との国際シンポジウム～
多文化の中の心理学

The 2nd International Academic Interchange
Meeting with University of Western Australia
Trans-cultural Psychology

【期間】 2009年11月24日（火）～26日（木） 24 (Tue)-26(Thu) November, 2009

【主旨】 自己と組織の形成、対人関係の特徴、心理発達における臨床課題について、アジア圏心理学の将来像を見据えながら議論する。

【講演者、発表者】

Professor David Morrison (Head of School of Psychology, University of Western Australia)

Professor Murray Maybery (School of Psychology, University of Western Australia)

Dr Elizabeth Newnham (School of Psychology, University of Western Australia)

Mr Brad Farrant (School of Psychology, University of Western Australia)

森岡正芳教授（神戸大学大学院人間発達環境学研究科） / Professor Masayoshi Morioka (Graduate School of Human Development & Environment, Kobe University)

ペトラ・エロース（神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究生） / Ms Petra Eros (Research Student, Graduate School of Human Development & Environment, Kobe University)

金季実（神戸大学大学院人間発達環境学研究科博士課程後期 1 年） / Ms Kye-Shil Kim (Doctoral Student, Graduate School of Human Development & Environment, Kobe University)

【プログラム】

11月24日（火） / 24 November (Tue)

10:00～11:00 @発達科学部大会議室 / Large Meeting Room, Faculty of Human Development

Lecture: Professor David Morrison, 'Multilevel approaches to stress management: Trading off certainty with impact.'

11:15～12:15 : 発達科学部大会議室 / Large Meeting Room

心理学と文化に関わる小講演：森岡正芳教授

Lecture on Psychology and Culture: Professor Masayoshi Morioka

14:00~15:00 : 発達科学部大会議室 / Large Meeting Room

Presentation: Dr Elizabeth Newnham, 'Improving clinical psychology outcomes with individualized feedback to clinicians and patients.'

15:00~16:00 @発達科学部 A303 / A303, Faculty of Human Development
院生交流会 / Exchange between Postgraduate Students

11月25日(水) / 25 November (Wed)

10:00~11:00 発達科学部大会議室 / Large Meeting Room

Lecture: Professor Murray Maybery

'Atypical Perception and Cognition Associated with the Autism'

11:15~12:15 発達科学部大会議室 / Large Meeting Room

話題提供：金季実 / Presentation: Ms Kye-shil Kim

'The Living Experience of Sibling of Sick Children'

14:00~15:00 発達科学部大会議室 / Large Meeting Room

Presentation: Mr Brad Farrant

'Longitudinal Analysis of the Parental and Child Factors Involved in the Development of Perspective Taking and Pro-Social Behaviour'

15:15~16:15 発達科学部大会議室 / Large Meeting Room

話題提供：ペトラ・エロス / Presentation: Ms Petra Eros

「不登校—日本とハンガリーで (School Truancy in Japan and Hungary)」

16:15~17:00 発達科学部大会議室 / Large Meeting Room

総合討議 / Round-table Discussion

18:00~ 懇親会 (大会議室) / Joint Reception @Large Meeting Room

11月26日(火) / 26 November (Tue)

終日 / All Day フィールドワーク / Fieldwork

Multilevel approaches to stress management: Trading off certainty with impact.

David L. Morrison

Abstract

When considering stress intervention strategies within organisational settings a variety of options are available to practitioners including job redesign, clarification of role relationships, developing coping skills, and

employee assistance in terms of medical or psychotherapeutic treatment. It seems that many organisations focus on some but not all of the above when seeking to ameliorate the effects of exposure to stress. Most appear to address stress in the work place at the individual level in favour of assuming a broader perspective that incorporates organisational change of some sort. The question often asked is which approach is likely to be the most effective given that in one way or another all approaches are expensive. Evidence from a series of studies is presented which suggests that changes at the job level in objective job characteristics will have a modest but highly predictable outcome. There is more variance to be explained at the level of individual perceptions but their causal mechanisms are complex and less well understood. Changing individual level perceptions of job characteristics may be broken into strategies which involve psychological management through leadership behaviours and the identification of traits and abilities that improve perceptions of organisational fit. .

Biography



David Morrison began his training in Organizational Psychology at the University of Sheffield where he gained an MA in Occupational Psychology from the MRC Social and Applied Psychology Unit. He later completed a PhD from the University of Wales in the area of Human Factors studying problem solving in complex industrial systems. His publications span developmental psychology, engineering, business and organizational psychology journals. His work has been applied across public and private sector organizations most recently with respect to selection and performance management. David is currently a Professor at the University of Western Australia and Head of the School of Psychology.

Atypical Perception and Cognition Associated with the Autism

Murray Maybery

Abstract

Our research on autism has focused primarily on the deficits and assets in cognition and perception associated with the disorder. Research with samples of children with an autism spectrum disorder (ASD) is

complemented by research on samples of university students selected for their extreme scores on the Autism-spectrum Quotient (AQ; Baron-Cohen et al, 2001). One particular focus of our work has been on the Weak Central Coherence (WCC) account (Frith, 1989), according to which autism is characterised by limitations in global or integrative processing but strengths in local or detailed processing. Two of our early studies provide support for this WCC profile in the visuo-spatial domain, and showed that differences consistent with WCC were independent of theory-of-mind and executive-functioning deficits in ASD samples. Our more recent studies indicate that the profile of visuo-spatial processing identified with WCC also characterises university students who score high on the AQ relative to those who score low on this instrument. High AQ scorers show evidence of impaired higher-level global processing but superior low-level detailed processing, relative to low AQ scorers. Thus the unusual pattern of deficits and assets in visuo-spatial processing in autism extend to individuals in the general population who report mild autistic traits. A second area of work at UWA has been to examine the proposal that children with autism are limited in their use of inner speech. We have investigated several cognitive domains for which inner speech has been argued to mediate performance (memory, set shifting, concept learning) and used manipulations intended to affect use of inner speech (e.g. articulatory suppression). We have found evidence of restricted use of inner speech in children with autism in each of these domains. Our current work in this area is aimed at establishing what forms of representation other than verbal representations mediate cognition in autism.

Biography

Murray Maybery completed a BSc (Hons) degree at the University of Melbourne and then a PhD in the School of Psychology at the University of Queensland before taking up an academic appointment at the University of Western Australia (UWA) in 1989. He is now a Professor and Deputy Head in the School of Psychology at UWA. While Murray has 80 publications spanning a number of fields, his recent research has been concentrated in primarily two areas, working memory in adults and atypical cognition in autism.



Improving clinical psychology outcomes with individualized feedback to clinicians and patients.

Elizabeth A Newnham

Abstract

Physical health care utilizes a suite of tools, such as the thermometer, for measuring response to treatment. However, reliable systems of patient monitoring are rare in mental healthcare. This is problematic as a significant minority of patients do not experience reliable change during psychotherapy, and a small proportion deteriorates (Hansen et al., 2002; Newnham et al., 2007). A need therefore exists for an instrument that can assist in rapid clinical decision making in inpatient and day patient psychiatric care. To do so, it is important to first define clinically significant recovery in psychiatric care, and provide criteria for clinicians to judge outcome in routine practice. Second, the development of a quick and easy-to-administer system of progress monitoring and real-time feedback is required. Third, the system must be evaluated to determine clinical effectiveness. Using the World Health Organization's Wellbeing Index, a program for monitoring patient progress and providing feedback to clinicians and patients was established at Western Australia's largest private psychiatric service (Newnham et al., 2009). The sample consisted of 1308 consecutive inpatients and day patients whose primary diagnoses were predominantly depressive (67.7%) and anxiety (25.9%) disorders. Feedback to patients and clinicians was effective in reducing depressive symptoms ($F(1,649)=6.29, p<.05$) for those patients at risk of poor outcome, but not effective in improving wellbeing ($F(1,569)=1.14, p>.05$). The findings support the use of progress monitoring and feedback in psychiatric care to improve outcomes, and raise questions about changes in wellbeing during psychotherapy. Monitoring patient health and providing feedback has the potential for universal improvements in mental healthcare, applicable to a wide variety of settings.

Longitudinal Analysis of the Parental and Child Factors Involved in the Development of Perspective Taking and Pro-Social Behaviour

Brad Farrant

Abstract

This talk will discuss the findings of my PhD research into the factors involved in the development of perspective taking skills and pro-social

behaviour in typically developing children and those with specific language impairment. The results of several strands of this longitudinal research will be reviewed from the theoretical perspective that social interaction and the resultant shared practices play critical roles in the development of children's social cognition and behaviour. Questions addressed include: 1) the roles of parental and child cognitive and emotional factors in the development of children's conversation skills, 2) the relationships between parental language input, children's language skills, children's cognitive flexibility, and the development of children's perspective taking (emotional perspective taking, visual perspective taking, theory of mind) skills, and 3) the roles of the aforementioned factors in the development of children's pro-social behaviour. The integration of these findings produces a model which furthers our understanding of the development of perspective taking skills and pro-social behaviour in typical development and children with specific language impairment. The implications of these findings in different cultural settings and directions for future trans-cultural research will be highlighted and discussed.

Bio-Sketch

Brad Farrant completed a Bachelor of Science (First Class Honours in Psychology) at the University of Western Australia in 2005 and was awarded the H.L. Fowler Prize in Psychology for the best research investigation as an extramural project and the Australian Psychological Society Prize in Psychology for being the best student in the Honours course. The findings from Brad's Honours project have been published in the journal *Child Development*. In 2006 he was awarded a Hackett postgraduate scholarship by the University of Western Australia and he is currently completing a PhD in Developmental Psychology which aims to further investigate the factors involved in the development of children's socio-cognitive skills and social behaviour.



—大合唱—Scarborough Fair

【期間】 2009年11月24日 12:30-13:00

【場所】 神戸大学 発達科学部 B棟

【主旨】 当日はピロティの階段を中心に（できれば）50名以上集まって、10回くらい繰り返し（サイモンとガーファンクルで有名な）「スカボロー・フェア」を詠唱します。

演出としては、最初一人か二人で歌い始め、次第に数が増えていくようなことを考えています。「飛び入り」も歓迎です。

発達科学部（あるいは神戸大学）に関わる全ての皆さん（学生、教職員、スタッフ、etc.）の中から「一緒に歌ってもいい」という方を広く募集します。後のほうで登場して、少しだけ歌うというのもアリです。

楽器での参加も大歓迎です。少しでもご関心をもたれた方、あるいはこういう人を推薦したいという方等がおられましたら、下記まで。

また、この企画に、関心を持たれそうな方に随時お話しただけですと幸いです。当日までに一、二度、練習の機会を持ちます。

皆で歌えば楽しいと思いますので、どうぞ宜しくお願い致します。

田中 成典 神戸大学大学院工学研究科情報知能学専攻 tanaka2@kobe-u.ac.jp

木村 純子 HCセンター 大学院 GP スタッフ kimuraj@garnet.kobe-u.ac.jp

内線 7969

【歌唱指導】 発達科学部の教員



11/25 (Wed)

障害者スポーツから
アダプテッド・スポーツへ

To Handicapped Sports from
Adapted Sports

～障害者スポーツからアダプテッド・スポーツへ～

To Handicapped Sports from Adapted Sports.

【期間】2009年11月25日（水） 13:20～16:00（於：F256）

【主旨】パラリンピックなどの大規模スポーツイベントを通して見えるもの（その国の経済的状況を反映していること）、学校教育現場における現状、障害者優先スポーツ施設等における現状、などを通して、全ての人の生涯スポーツ・マネジメントを考える。

【講演者】関西学院 聖和短期大学 保育科 金山 千広 准教授

【概要】アダプテッド・スポーツ（adapted sports）とは、個人の身体能力、年齢、性別、障害の有無などにとらわれず、ルールや用具を工夫して、その人に適合させたスポーツを展開することです。この発想は、障害者を含めた幼児から高齢者、運動初心者などあらゆる人を対象とした“生涯スポーツ”の場面に生かされています。この交流では、スライドやVTRを通してアダプテッド・スポーツの現状を紹介します。アダプテッド・スポーツを通して全ての人のスポーツライフをみなさんと一緒に考えてみましょう。

【講演者略歴】

学位：京都教育大学大学院 教育学研究科修了 修士（教育学）

広島大学大学院 総合科学研究科博士後期課程在学中

- スポーツ経営学の立場から、生涯スポーツを踏まえたスポーツの普及振興を研究している。特に公共施設や学校において提供される、幼児から高齢者を対象にした運動プログラムや障害者スポーツ等を含めたアダプテッド・スポーツの質的評価に興味を持っている。
- （財）日本障害者スポーツ協会 養成研修部 研修部会委員
- 受賞暦：平成16年6月 第7回秩父宮記念スポーツ医・科学賞奨励賞 受賞
- 著書：
 - スポーツ経営学 大修館書店 2000年3月（共著）
 - 図解 スポーツマネジメント 大修館書店 2005年4月（共著）
 - 改訂版スポーツ経営学 大修館書房 2006年4月（共著）ほか

※本企画は、（社）日本体育学会「2009年度アダプテッド・スポーツ科学専門分科会 地域活動支援助成」を受けて実施します。



11/26 (Thu)

第 5 回

国際市民性教育ネットワークセミナー

第 5 回国際市民性教育推進ネットワーク・セミナー

【期間】 2009 年 11 月 26 日（木）、27 日（金）

【主旨】 世界の総合学習・シティズンシップ教育・キャリア教育の成果に学ぶ
『人生設計型学校カリキュラム』の構成と展開

【講演者または招聘者、発表者】

Dr Libby Tudball（モナシュ大学教育学部）

Professor Ann Kjellberg（ストックホルム大学教育学部教授）

井上博嗣氏 / Mr Hiroshi Inoue（神戸大学附属明石小学校教員）

【プログラム】 2009 年 11 月 26 日（木） / 26th November 2009（Thu）

時間	内容	場所
9:30~	今谷 順重先生 ご挨拶	発達科学部 大会議室
9:45~ 11:45	講演「オーストラリアにおける最近の総合学習及び市民性教育の 動向」 Dr Libby Tudball（モナシュ大学教育学部）	
13:30~ 15:30	講演「スウェーデン及び EU における最近のキャリア教育の理論と実 践」 Professor Ann Kjellberg（ストックホルム大学教育学部）	

2009 年 11 月 27 日（金） / 27th November 2009（Fri）

時間	内容	場所
9:30~ 10:30	ワークショップ「オーストラリアにおける総合学習」 Dr Libby Tudball	発達科学部 大会議室
10:30~ 11:30	ワークショップ「スウェーデン及び EU におけるキャリア教育」 Professor Ann Kjellberg	
14:15~ 16:00	井上博嗣氏 / Hiroshi Inoue（神戸大学附属明石小学校教員）の国 際理解教育『アジアの多文化理解』の授業参観と討議	神戸大学発達 科学部附属明 石小学校

Effective practice in Civics and Citizenship Education

—A guide for pre-service teachers—

Dr Libby Tudball

Summary

This guide provides information, teaching and learning activities, resources and links to the national Civics and Citizenship Education (CCE) website, to enable pre-service teachers to develop effective practice in CCE and to achieve the following goals:

- 1 Understand the importance of CCE in school programs
- 2 Explain why CCE is on the education agenda
- 3 Recognise CCE as an 'organising principle' and core area for curriculum, pedagogy and assessment in schools
- 4 Develop engaging whole-school programs for CCE
- 5 Connect CCE to related learning areas, national priorities and quality school programs

Making connections between CCE and other related learning areas is vital in the achievement of more effective student understanding. *The Melbourne Declaration* recognises that these connections should encompass teaching and learning about issues that are pertinent from the local, to national and global spheres. The document notes that:

Global integration and international mobility have increased rapidly in the past decade. As a consequence, new and exciting opportunities for Australians are emerging. This heightens the need to nurture an appreciation of and respect for social, cultural and religious diversity, and a sense of global citizenship.

The document also reminds educators that complex environmental, social and economic pressures such as climate change that extend beyond national borders pose unprecedented challenges, requiring countries to work together in new ways. To meet these challenges, Australians must be able to engage with scientific concepts and principles, and approach problem-solving in new and creative ways. [and] As well as knowledge and skills, a school's legacy to young people should include national values of democracy, equity and justice, and personal values and attributes such as honesty, resilience and respect for others.

This guide provides preservice students with resources and strategies to be able to develop effective teaching and learning in CCE that can better prepare young Australians in the C20th to be able to meet these goals.

Profile



Dr Libby Tudball lectures and teaches in the double degree undergraduate and post-graduate education programs in the Faculty of Education. She is the lecturer in charge of Social Education method, and has taught subjects including Social Foundations of Schooling, Teaching and learning, The Teachers' World and Developing Pedagogy. Libby's PhD focused on the function of professional communities and their connection with improved student learning in Civics and Citizenship Education. Her other research interests include the internationalisation of education, global education and teacher professional development. In 2000, she received a Federal government National Academic Achievement Award for her work in teacher professional development in Civics and Citizenship Education (CCE). Libby developed with colleagues, the Victorian Professional Development program for teachers in CCE, and is involved nationally in teacher professional development (PD) and the pre-service training of teachers in CCE. She is currently redeveloping the CCE PD program with colleague Anita Forsyth. Libby is the President of the Social Educators Association of Australia, and a life member and active participant in Social Education Victoria. She is a regular writer for the Australian Teachers of Media.



11/27 (Fri)

日米女性労働セミナーの意義

日米女性労働セミナーの意義

－当事者性を重視した労働者の学びを考える－

【期間】 2009年11月27日（金） 中会議室 A

【主旨】 ニート、フリーターが社会問題化し、昨年来の経済不況も乗じて、青年・女性の就職ないしは雇用状況はとりわけて深刻になっている。同時に「派遣切り」「雇い止め」の不当さがマスコミでも取り上げられ、非正規労働から正規労働への移行が求められている。しかし、非正規労働から正規労働への移行は如何にして行われるべきか、また移行先としてイメージされている正規労働はどのようなものかについて、働く当事者が語ることは、それほど多くない。

日本の非正規労働は1960年代に「主婦のパート労働」として一般化し、1995年の「新時代の『日本的経営』」（日本経営者団体連名）を契機に、その後の派遣労働法の改正を経て、主婦だけではなく、青年や男性に拡大した経緯がある。今日では、雇用労働者の4割を女性が占めるが、その半数以上は非正規労働で働いている。これらの経緯と事情の下で、女性労働は正規労働であっても「周辺労働」「低賃金労働」として位置づけられてきた。このような中であっても、自らの働く意味を問い、労働者の尊厳を守ろうと努力してきた人々がいる。それらの人々を対象として、2006年に「日米女性労働セミナー」が開催された。同セミナーは「労働者教育」ということばさえ忘れられたかのような日本の事情の中で行われた、女性労働者教育実践として注目された。

同セミナーにおいて、女性労働者が自らの労働の価値をどのように認識し、どのようにして困難に立ち向かう資質を得たのか、「日米女性労働セミナー」の意義や内容、方法等々について、同セミナーの日本側責任者であったICUの田中教授に詳述いただき、今日的な日本の状況の中で、労働者教育として必要な内容と方法について、学生同士での意見交換を行いたい。

【講演者】 田中和子（国際基督教大学教授）

【プログラム概要】

- | | |
|-------------|-------------------|
| 14:30～15:30 | 田中和子さんの講演 |
| 15:30～16:30 | グループに分かれて意見交換、まとめ |



12/2 (Wed)

在米心理カウンセラーが教える
留学サクセスマニュアル

How to succeed in studying abroad

—在米心理カウンセラーが教える留学サクセスマニュアル—

How to succeed in studying abroad

【期間】 2009年12月2日（水）

15:00～17:00 神戸大学 発達科学部 大会議室

【主旨】 社会人になってから海外留学を決意し、アメリカでの進学・結婚・就職を果たしている心理カウンセラーの経験・現実を講演。

社会に出てからの現実と海外で実際に暮らすサバイバルを実体験を基に学生へのメッセージを届ける。

【プログラム（概要）】

- ・留学生の直面する共通の問題とストレスについてのケーススタディ。
- ・カルチャーショック、言葉の問題、プレゼンテーション・ディスカッションの恐怖、アメリカ人との対応、差別、実家との問題。
- ・友達や家庭との関係の変化と「自分で自分を助ける力」について。

【 Program 】.

- Case study of Japanese students in the US and their typical problems and stresses.
- Culture shock, language barrier, fear of presentation & discussion, communicating with American people, discrimination, and problems from home.
- Difference between the Japanese way of relating to people vs. the American way. How to build strengths to help yourself.

【講師プロフィール】**角谷 紀誉子 (かくたに きよこ)**

アメリカに住む日本人を対象に、海外生活を成功させるための心理カウンセリングを行っている。留学、就職、駐在、国際結婚、アメリカで育った子どもとの世代・文化ギャップなどで生じるストレスや問題を扱う。

著書『在米心理カウンセラーが教える留学サクセスマニュアル』アルク。

オフィス : www.successabroadcounseling.com

関連ホームページ : <http://kaigai.alc.co.jp/world/kokoro/>
<http://www.junglacity.com/pro/heart/index.htm>

留学を成功させるには、学習面の努力が大事なのももちろんですが、精神面の強さも欠かせません。心のケアの問題を中心に、留学を成功に導くための秘訣を徹底的に紹介します。日本を発つ前の「留学目的の設定」から、留学中に直面するさまざまな問題まで、その解決方法が満載。充実した留学生活を送るために、全留学生、留学志望者は必見です。

Kiyoko Kakutani was born and raised in Kobe. After working for a Japanese company for several years, she went to study in the U.S. She graduated from Hunter College School of Social Work in New York in 1991 and received a Master of Social Work Degree. She is a licensed independent clinical social worker in the state of Washington. She founded Success Abroad Counseling in Seattle that provides counseling and online advice services to Japanese people who come to the U.S. to study, to work, and to live. She will talk about her own experience as an international student and share survival skills in living and working in a foreign country. She authored “Study Abroad Success Manual by mental health counselor in the U.S.” published by ALC PRESS Inc.

Home page: www.successabroadcounseling.com

Related sites: <http://kaigai.alc.co.jp/world/kokoro/>

<http://www.junglacity.com/pro/heart/index.html>





主催：神戸大学大学院人間発達環境学研究科

事務局：大学院GPプロジェクト

「正課外活動の充実による大学院教育の実質化」

プログラム編集：学術WEEKS 2009準備委員会

〒657-8501 神戸市灘区鶴甲3-11

Phone: +81-(0)78-803-7969 FAX: +81-(0)78-803-7971

URL: <http://gph.h.kobe-u.ac.jp/> (大学院GPプロジェクト)

URL: <http://www.h.kobe-u.ac.jp/aew> (学術WEEKS特設ページ)